

第 22 回薩摩焼窯元 14 代 沈寿官氏のこと

沈寿官氏死去を報道で知り、司馬遼太郎氏の「故郷^{ぼう}忘じがたく候」を思い出した。16 世紀末、豊臣秀吉の朝鮮出兵により多くの陶工者が九州に強制連行され、先祖代々筆舌に尽くし難い^{かんなんしんく}艱難辛苦を味わってきたことが記された書である。沈氏は、その連行された一人の 14 代目に当たり、陶工士として名声を博している。戦後数年が経ったとき、美術関係者からの誘いで、故郷のソウル大学で講演をする機会を得られた。以下、沈氏の発言を記す。

「私には、韓国の学生諸君への希望がある。韓国に来てさまざまな若い人に出会ったが、若い人の誰もが口をそろえて、36 年間の日本の圧制について語った。もったもであり、そのとおりであるが、それを言い過ぎることは、若い韓国にとってどうであろう。言うことは良くて言い過ぎるとなると、その時の心情はすでに後ろ向きである。新しい国家は、前へ前へと進まなければならないというのに、この心情はどうであろう」

司馬氏は、この同じ言葉が日本人によって語られるとするならば、聴衆は黙っていないかもしれなかったと語っている。

本来、薩摩人らしく感情豊か過ぎる沈寿官氏は、時々涙のために絶句した。そして、「あなた方が圧制 36 年を言うなら、私は 370 年を言わねばならない」と結んだ。すると学生たちから、沈氏への友情の歌が講堂をゆるがし始めた。沈氏は、壇上で呆然となった。涙が眼鏡を濡らし、大合唱が終わるまで、壇上で身を震わせ立ち尽くしていた。

この本を、韓国の政治家に読んでいただきたいと願う。次回は、「道の駅花の三聖苑その 3」を再び書きます。